

教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. **25**
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 令和4年(2022)3月1日

目次

- シリーズ「國學院大學の教育は、今」…………… p.2
 - ・ 令和3年度 オンラインコーヒートーク
 - ー コロナ下の授業実践で苦労したこと、考えたこと、見つけたことー
- 履修登録の基本的な考え方について
 - ー 共通教育プログラムを履修登録するときの参考にー…………… p.7
- あらためて、ノートテイクとは？ ー オンライン授業を経験してー…………… p.9
- 令和2年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」受賞者からの声…………… p.12
- 教育開発推進機構 オンライン講演会・研修会 開催報告…………… p.14
 - ・ 令和3年度 オンラインFD講演会（令和3年10月27日）
 - ・ 令和3年度 オンライン新任教員研修・FDワークショップ
 - ・ 令和3年度 データサイエンスFD研修会（令和3年12月15日）
- 教育開発推進機構彙報…………… p.16
- 啐啄同時 そったくどうじ ー 編集後記ー…………… p.16

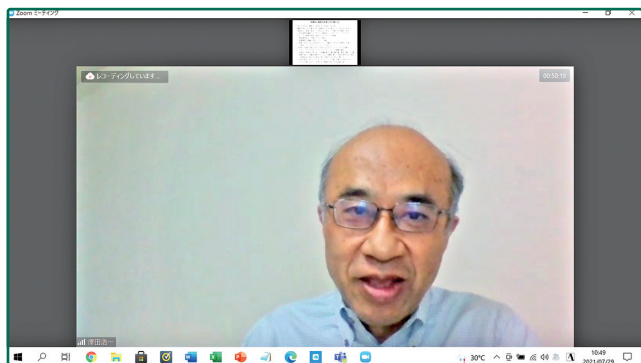
シリーズ「國學院大學の教育は、今」 令和3年度 オンラインコーヒーブレイク

—コロナ下の授業実践で苦労したこと、考えたこと、見つけたこと—

令和3年7月29日開催の「オンラインコーヒーブレイク」の様子についてお届けします。この企画は、令和2年度以来、これまでのコロナ下での授業実践に伴う様々な工夫や苦労の共有と意見交換を行い、先生方の今後の授業運営に役立てていただくという取り組みです。9名の話者提供者の先生から、授業の取り組み内容、苦労したことや得られた気づきについてお話しいただきました。今回は、そのエッセンスを紹介したいと思います。

第1セッション

特に対面が重視される科目での 苦労と工夫



澤田 浩一 先生

(文学部史学科教授)

2つのタイプの授業を担当しています。1つは社会科学系の教科教育法で、2年生中心の社会科学の教育法、3年生中心の公民科の教育法です。

基本的に、2年生の社会科学の教育法の授業は、模擬授業は板書ですという形にしています。そうすると思考の過程がよく見える。オンラインを使いこなすということも大事になるとは思いますが、プレゼンテーションで進めると、やはりプロセスがよく見えない。だからわざわざ手書きでやっています。

他方、公民科教育法の方はこれからの時代もあるので、社会科学教育法で板書でやった上で、公民科教育法ではパ

ワーポイントのメリットとデメリットをうまく組み合わせるように注意をして使うことにしています。

2つ目は半期の教職科目で、全部対面の授業で実施しました。「教育と社会」という科目では、基本的にグループワークと、その全体での共有ということになっているので、そうすると対面でないで全体での共有ができない。グループワークに限ればオンラインはスムーズなところもありますが、全体での共有が難しいので対面にしました。とくに、全体での共有の部分は、学生に非常に好評です。というのも、今回は50人いたので10グループありましたが、10グループ聞いてみると本当に色々な意見が出てきて、1グループだけ聞いているだけではなかなか多様な意見が出てこないものです。そうした点で、対面で実施した意義を感じ取れる授業となりました。



島田由紀子 先生

(人間開発学部子ども支援学科教授)

普段は表現の科目を担当していることが多いですが、

昨年度はほとんどオンラインでした。

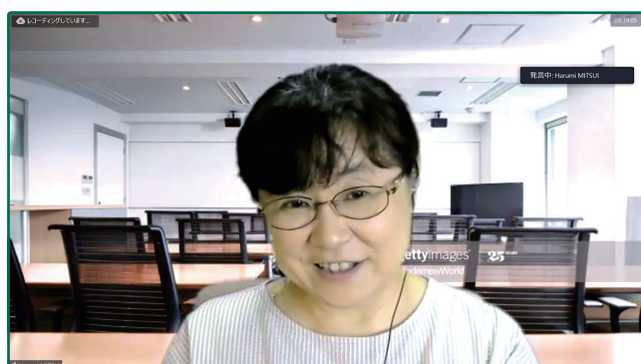
今回は、その中でも「保育内容表現」で実施したある回について報告します。その回では、手や足、あるいは体も使って表現する、つまり、道具や材料に頼らず、手とか足とか体を使って表現するとはどういうことなのかということを経験し、考えてもらうという内容でした。この中で、手の音だけを使って短い作品を作ってみよう、というのをやりました。4～5人のブレイクアウトセッションで、手の音だけでオリジナルの方法を考えて表現するというのでやってもらいました。すると、学生の感想としては、「オンラインで音を表現するのは難しかったけれども、オンラインだからこその工夫などが必要で面白かった」など肯定的に捉えてくれている人が多く、結果、対面とは違うことができたように思います。

その一方で、授業をやっている間に思えたのは、学生の表現や作品などを見るのは出来上がったものをK-SMAPY II上の投稿で確認することが多く、そこまでの過程での助言をすることがほとんど出来なかった点です。途中で学生同士の意見交換をするということで、ブレイクアウトセッションを使用して作成している途中のところまで紹介し合う、などのことは何度かやりましたが、それでも対面に比べるとやはり限界を感じました。

それでも、表現を中心としている授業なので、学生同士が繋がるような機会になってほしいと考え、極力ブレイクアウトセッションの回数を増やして取り組むようにしました。

第2セッション

ハイブリッド形式の試み —悩みと気づき—



三井はるみ 先生

(文学部日本文学科教授)

ハイブリッド授業として担当した授業は64名が受講した、典型的な講義科目です。火曜日1限で、受講生は2限目に全員が対面の必修科目があるということで、大半の

学生は教室で受講しています。従って、基本的には対面授業で、zoomで受けている学生も少しいるという感じでした。

受講者には授業終了後にコメントシートを記入してもらうようにしていました。K-SMAPY IIで毎回書いてもらうという形です。授業に出ることとコメントシート提出を合わせて出席とする、としました。

授業の実施自体ですが、まず機器の扱いでは、慣れれば普通の対面授業でプロジェクターを使うというのと変わらないです。操作自体、手数はかかりますが難しいというわけではないです。

他方、教室が大きいので学生に発言してもらいにくいということも感じました。そこで、一方通行になりがちなところを補うため、コメントシートへのフィードバックをより意識して行うようにしました。

それから昨年の同じ授業ではオンデマンドも行いましたが、それと比べると、やはり学生の様子を見ながら話せることは非常にやりやすいです。学生からの質問も、対面だと授業前後に気軽に立ち寄ってもらえるという感じがしました。

遠隔化前の対面授業と較べてみると、学生がとても熱心にコメントペーパーを書いてくれました。対面授業では紙での実施でしたが、やはり自分から端末に向かって書くということがあるせいか、しっかりと考えてまとめている感想が多かったです。そのため、私の方でも、フィードバックの際に取り組みがいのある意見というのが多く見られるようになり、よかったです。



鈴木 崇義 先生

(教育開発推進機構准教授)

昨年度後期に渋谷とたまプラーザでハイブリッド授業を担当しました。それぞれ、教室での受講者は数名でした。

授業実施については、慣れればプロジェクターを使った授業と同じような形で実施することができました。室内ではスライドショーをスクリーンに映し、同時にzoomで画面共有したり、またカメラで黒板を映すというスタ

イルで行いました。

実際に行ってみて考えるメリットとしては、(1) 受講生がオンラインか対面かを選べる、(2) ちゃんと学生に向かって話ができ、教員側のモチベーションが保てる、(3) 録画編集するなどの時間を取られない、という点が上げられます。工夫次第では授業の幅が広がる可能性はあると思います。

他方、デメリットはどうかと言うと、(1) 教室で受講する学生数が毎回読めない、(2) 機材の準備にはどうしても手間がかかってしまう、などです。

また、教室で受けている学生と、オンラインで受講している学生の両方に配慮する必要があります。教室だけで盛り上がってしまっても良くなく、オンラインの学生に配慮して教室の学生たちが退屈してしまうことも避けることを意識する必要があります。

さらに、ハイブリッドならではの双方向性の担保の難しさもありますが、私の場合は、ハイブリッドに切り替えた時、オンライン上から学生がどんどん声を上げてくれたのが、教員としては非常に嬉しかったですし、また授業も雰囲気は良いものになっていったように感じています。

第3セッション

オンライン授業での発見 —アフター・コロナに向けて—



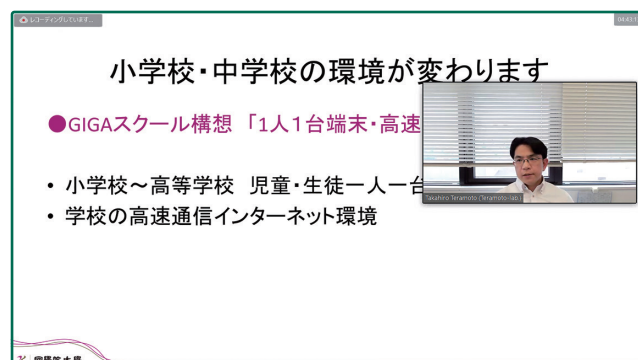
山田 佳弘 先生

(人間開発学部健康体育学科教授・教務部長)

令和2年度の前期は全部遠隔授業という形で、前年度から比べると考えられないような変化が起こりました。これらの遠隔授業によってもたらされたものは何なのかということですが、昨年度の前期と後期の末に教員と学生にアンケートを行った結果、学生も、教員の側からも「遠隔授業も、やり方や、科目の特性、受講人数で選別すれば悪くないのではないか」という肯定的な結果が出ています。

さらに、学生に令和2年度の総合的な満足度を聞いたところ、「大いに満足」「満足している」を合わせて70%ほどの評価が得られました。コロナの中、遠隔授業が多く行われた中でこうした結果が出たというのは、教員側の授業に対する意識の変化が起こったところが大きく影響したと思います。それはコロナが起こる前までは教員主導の授業の展開というものだったものが、遠隔実施を余儀なくされ、今まで教室で当然のようにやっていたものを、画面の中でも学生が理解してくれるように対策を立てないといけないという、学生を意識した授業準備や展開がなされた、つまり、先生方が「学生を中心とした授業」の展開を意識して行っていただけだと思います。

そして、来年度ですが、やはりまだすぐに以前のような形に戻れないのが現状だと思います。その中で、これからの本学の授業は一体どうなっていくかということですが、アンケートでも学生、教員ともに「対面を基本としながら遠隔をうまく活用する」という意見が多くあります。よって、これからの本学の授業は、質保証を念頭に置いた「授業形態の多様化」ということを考えていくべきだろう、というのがこの1年半の中で得た所感です。



寺本 貴啓 先生

(人間開発学部初等教育学科教授)

現在、小学校の教員養成系の授業を担当しています。小学校も、中・高も、学校におけるネット環境がかなり変わってきています。「ギガスクール構想」が進んでいて、全国の小・中・高の児童、生徒に1人1台端末を持たせ、学校も電源や高速インターネットの環境を整えます。また、児童ら一人一人にアカウントを割り振って成績や学習データをやり取りできるような環境を整えます。

例えば小学校理科で言えば、端末を使うことで実験の様子を「撮影する」ことが挙げられます。これまで結果をノートに書いていたものを、写真や動画ですぐに記録に残せるわけです。すると、これまで一瞬で終わるような実験でも、記録に残すことで何度も見るができるわけです。加えて、検索などを使用し、いろいろな情報にアクセスすることもできます。このように、学習の精度

が格段に上がることになります。

以上のような状況に照らせば、我々は教員育成、つまり「先生」を教育育てることが責務ですから、このような環境を学生にも提供できるよう整えて、端末を使って実際に教えていくということがとても重要な点だと思います。初等教育ではとくに顕著で、少なくとも小学校と同じ環境を整え、学生も端末を用意し、教員側も機器などの使い方や活用方法をきちんと修得していかなければならない、もうそういう時代まで来ていると思います。

また、大学全体としても、2校地問題の解消のためなど、会議の対面と遠隔の併用が当たり前になるように我々の意識と環境を整備することや、たとえば仮想空間システムにおける学生の居場所づくりをしたりするなど、さらに教員も環境の変化に合わせアップデートしていく必要があります。このように、アフター・コロナでも継続していろいろと検討する余地が残されていると考えています。

第4セッション

外国語科目における オンライン授業の実践



針谷 壮一 先生

(文学部外国語文化学科教授)

中国語を担当しています。昨年度は、1・2年生向けの授業では、教科書の訳や発音の確認などといった教室授業を再現したライブ型を40分程行い、その後、発音を聞き取る練習問題をオンデマンド型で10分という組み合わせで行いました。また、3年生向けの授業はオンデマンドで行いました。中国語の新聞を読む授業では、私の方で文法や単語を解説して、次回までに日本語に訳す課題を出し、その答え合わせを翌週の授業で行う、という形などです。

これらの経験を通して、とくにライブ型では、著作権の問題への注意は必要ですが、画像資料などをその場で

即座に学生に見せられる点は良かったと思います。通常の教室だとパソコンなどの事前準備が必要なので、そういう点では便利だと思いました。

また、外国語ならではの問題かもしれませんが、発音練習などでは、こうした状況下での対面の場合、学生との距離が離れている上にマスク等で音が不鮮明になります。その点、ライブ型のマイク越しの音声の方が鮮明に聞こえますので、むしろライブ式の方が教えやすいという印象を持ちました。

以上、昨年度を振り返ると、やはり初級外国語の教育、最初の1年2年目程度までは懇切丁寧な指導が必要ですので、オンデマンド型では厳しいと思いますが、基礎が身についた3年生以上ではオンデマンド対応も可能だと感じました。無論、外国語教育という観点で言えば、やはり一番はマスクなしで教室でやることだと実感していますが、こうした状況下ですので、対面とライブ型とのメリット・デメリットを考え、うまく組み合わせて実施していくのが良いだろうと考えています。



進藤 久乃 先生

(文学部外国語文化学科准教授)

フランス語科目を中心に担当しています。

まず、外国語教育を実施していく中でオンラインになって困るのが、語学教育でも主流になっているアクティブラーニングで推奨される教授法の実施が厳しいという点です。グループになって3人以上で練習するとか、一つの紙にみんなで書き込むなどのアクティビティは控えざるを得ず、加えて、発音練習も、大きな声で発音させるとか、口の形を見ながら指導するということができず、それらが障壁になっていたということが言えると思います。

そうした中で、私としては、教員間での情報共有を大切にしつつ、ズームのリアルタイムミーティングを40分程度行くとともに、それに付随する板書代わりの説明文書(pdf)を作成して授業内容を補っていくという点にとくに注力して進める形となりました。

他方、得られた気づきもありました。例えば、文法の授業が計画通りに進むということです。対面だと学生が

理解できていない雰囲気などを感じ取ってしまってゆっくり進むとか、テスト範囲を縮めるなどもありますが、オンライン授業だと事前に準備し、限られた時間の中でわかりやすくしようという意識が働くので、文法の授業は計画通り進み、学生にも好評でした。

また、特にこれから2～3年まだコロナの影響が続くと思われる状況の中で、これからも引き続きオンラインを利用できる場面が発音練習だと思います。教員がきちんと動画を準備しておけば、学生も繰り返しそれを見て心置きなく発音の練習をしていけるということから、そうした点でのオンラインの活用も重要だと思っています。



土肥 充 先生

(教育開発推進機構教授)

英語教育センターで英語を担当しています。

現在、様々な英語教育の問題点が指摘されています。まず、これまでの先生方と違い、英語については学生達が高校までですでに学習していますが、入学の段階でかなり力の差がある、また目的意識ややる気という面でも

ばらつきがあるという問題があります。また、高校までは英語は主要科目ですが、大学に入った途端に授業も週に2回だけ合わせて3時間しか学修せず、高校より減ってしまうというその重要性や取組の面でも難点を抱えています。

そうした中、英語教育センターでは、授業時間外にも英語学習が必要であるということから色々な取り組みをしていますが、ここでは、とくに今年から新たに導入した「Computer-Assisted Language Learning」略して「CALL」について述べます。

これは、ブラウザ上で、オンデマンドで学べる英語教育のオンラインシステムで、難易度別・目的別・地域別など沢山の教材が用意されています。

とは言え、オンライン英語学習は今どき珍しくなく、YouTubeなどでできるだろうと思うかも知れません。確かにそれらでは、ビデオを見たり音声を聞いたりできますが、問題点として「分からないものはいつまでたっても分からない」ということになってしまいます。その点、このCALLは、分からないことがわかるようになるまで、繰り返し学習できる仕組みになっています。

また、英語の授業では単語を調べることも多いですが、その手間が英語嫌いに拍車をかけてしまうこともあります。CALLは、辞書情報や発音も容易に確認でき、ヒントなども用意されていて、徐々に理解を深められるように設計してあります。

以上の通り、このような状況下ですが、学生がオンラインで24時間365日いつでも自分に合った教材で学修できるという環境の整備も重要だと考えています。



履修登録の基本的な考え方について

— 共通教育プログラムを履修登録する時の参考に —

学修支援センター 鈴木崇義

大学での学修の中心はなんといっても授業です。そして、毎年度あるいは毎期の授業を登録することを履修登録といいます。この履修登録は、毎回悩むことが多いのではないのでしょうか。受講したい授業が登録出来るだろうか、スムーズに卒業に進むためにはどうしたらいいのだろうか、自分の希望通りに履修登録ができているのだろうか、と不安や悩みは尽きません。また、履修登録の仕組みの複雑さがそれに拍車をかけます。

今回の記事では、平成29年度よりスタートした共通教育プログラムについて、学生が履修登録するという視点にたって、履修登録に関する基本的な考え方を説明します。名称に「共通」と冠していますが、実際には所属する学部学科等によって卒業要件となる単位数や単位取得すべき科目が異なるのです。学生の皆さんは、自分にとっての共通教育プログラムはどこにあるのかをしっかりと見極めてください。なお、原稿執筆時期（令和4年1月）の関係上、令和3年度の履修要綱にそって説明しています。

大学全体のカリキュラムと 取得すべき単位数

國學院大學全体のカリキュラムは、大きく分けて二つあります。一つは全学生が学ぶ科目の枠組みである共通教育プログラム。もう一つは所属する学部学科（専攻）ごとに体系化された専門教育科目です。

共通教育プログラムは、卒業要件となる124単位のうち、36単位以上（文学部、法学部、経済学部、神道文化学部）または26単位以上（人間開発学部）を、卒業までに取得しないといけません。

専門教育科目は64単位以上（文学部、法学部、神道文化学部）または74単位以上（経済学部、人間開発学部）を単位取得する必要があります。これは、所属ごとにカリキュラムが異なり、それぞれ自分の所属する学部学科（専攻）個別の体系に沿って学びを深めていくものとなっています。

なお、この専門教育科目と共通教育プログラムに求められている単位数を合計しても124単位にはなりません。あとは、124単位以上になるように、専門教育科目、共通教育プログラム、全学オープン科目など、卒業要件の単位として認定される科目から、自分の関心に仕掛けて授業を履修登録するとよいでしょう。

このように、國學院大學のカリキュラムは共通教育プログラムによって幅広い知識と様々なスキルを身につけ、専門教育科目によってそれぞれの学問分野を体系的に学び、深めることを目指しているわけです。これらを授業によってどのように学ぶのかを定めたものが履修要綱です。いわば、大学4年間の学修のルールブックであるといっても良いでしょう。

履修登録と履修要綱の見方

大学の授業は自分の所属している学科によって、単位取得すべき科目がちがいます。また、学生は所属の中からさらに細分化したテーマにそって学んでいくことになります。そのため、履修登録による時間割作成は、学生それぞれがそれぞれの興味関心にしたがって行う仕組みになっているのです。

履修登録をして時間割を作る際には、履修要綱とシラバスが重要な資料となります。シラバスは履修登録を考えている科目について、授業の内容や進め方、参考になる資料について知ることが出来る大事な情報源です。どの授業を履修するか、あるいは受講するに当たって何を準備すべきかを知るために、ぜひじっくり読んでください。

一方、履修要綱もカリキュラムを知る上で、より現実的な言い方をすると卒業への道筋を知るための大事な情報源ですが、その全体を眺めると、学生一人ひとりにとって必要な事項は、それほど多いわけではありません。例えば、神道文化学部の学生が文学部や法学部の専門科目のページを見る必要はほとんどないでしょう。また、教職課程や資格課程のページも、教員免許や各資格を取らない学生にとっては開く必要のない部分です。

このように、履修要項の共通教育プログラムに関する部分も同様に、皆さん自身にとって必要なことが書いてある部分はそれほど多くはありません。まずは、自分の所属や学年を手がかりに、その時必要な情報をピックアップするようにしてみてください。

共通教育プログラムの科目群

国学院科目群	国学院の建学の精神や神道、日本文化について学ぶ。 「神道と文化」2単位が必修科目※神道文化学部以外
言語スキル科目群	英語を中心とした外国語科目や、日本語コミュニケーション、文章構成力を身に付ける。学部学科ごとに必修科目が異なる。
STEM系科目群	科学、技術、工学、数学の分野を学ぶ科目群。コンピュータ関連の科目や論理的思考法などを学ぶ。学部学科により必修単位数が異なる（2～4単位）。
シチズンシップ科目群	法学（日本国憲法）をはじめとする法律や社会、経済に関する科目を学ぶ。文学部、法学部、経済学部、神道文化学部は2科目必修
専門教養科目群	他学部の学部学科専門科目から8単位以上、あらかじめ構成された6つのパッケージにより単位修得する。また、学部により履修方法が異なる。
ライフデザイン科目群	キャリア形成に関する科目。スポーツ科学や、公務員職に就くことを目指す学生に向けて開講されている。

ここからは、実際に履修登録をする学生の視点にたち、学修支援センターで主に質問をうける点に絞って述べてゆきます。まず共通教育プログラムの科目群を見てみましょう。全部で6つの科目群が並んでいます。履修要綱の共通教育プログラムの説明の箇所には、「卒業に必要な最低単位数」として、それぞれの科目群から何単位以上取得すべきかが表になっています。自分の所属に照らして、できるだけはやい学年で単位取得をすることをおすすめします。

さて、このうち、特に「専門教養科目群」については、学生からよく質問が寄せられます。この科目群は、「学部・学科の専門教育科目の中で、その学部・学科以外の学生でも履修可能な科目（全学オープン科目）」の中から、さらにいくつかの科目をピックアップして、6つの「パッケージ」にまとめて提供するものです。

専門教養科目とパッケージ

専門教養科目の6つのパッケージ

日本の文学と歴史	文学部開講科目
アジアの歴史と文化	文学部開講科目
世界の文化と思想	文学部開講科目
法学・政治学	法学部開講科目
経済学	経済学部開講科目
経営学	経済学部開講科目

パッケージは、上の一覧のようにそれぞれ学部専門教育科目から成り立っています。この6つの中から一つを選んで科目を受講し、8単位以上取得する必要があるわけです。なお、履修要綱にも記載されていますが、自分が所属する学部の科目から構成されているパッケージは選択することができません。「〇〇の学生は選択不可」などの注意書きに気をつけてください。また、神道文化学部のフレックスA（夜間主）に所属する学生はパッケージに関係なく専門教養科目群から任意に8単位以上取得することになっていますし、人間開発学部は専門教養科目群に卒業に必要な最低単位数は定められていません。このように、所属によって異なることに注意してください。これを、実際に履修できるパッケージ等に照らして一覧に

すると、次のようになります。

専門教養科目群（パッケージ）の履修方法

文学部	選択可能なパッケージ	法学・政治学、経済学、経営学
法学部	選択可能なパッケージ	日本の文学と歴史、アジアの歴史と文化、世界の文化と思想、経済学、経営学
経済学部	選択可能なパッケージ	日本の文学と歴史、アジアの歴史と文化、世界の文化と思想、法学・政治学
神道文化学部 フレックスA（夜間主）	選択可能な科目	専門教養科目群から合計8単位以上単位取得
神道文化学部 フレックスB（昼間主）	選択可能なパッケージ	日本の文学と歴史、アジアの歴史と文化、世界の文化と思想、法学・政治学、経済学、経営学
人間開発学部	必修ではない	必修ではないが、パッケージに沿うような形で履修することが推奨されている。

以上が、共通教育プログラムを履修登録する際に気をつけるべきことの概要です。

この他に注意しておきたい事項

ここからは、履修登録全般に関して、いくつか注意しておいてほしいことを述べておきます。

1) 履修登録期間を把握しよう

履修登録期間は前期が3月末から4月上旬、後期が9月中旬です。この期間はさらに事前登録期間や希望優先登録期間など細かく分かれていますので、詳細な情報が公開されたら早めにK-SMAPY IIにアクセスして、履修登録をしてください。

2) 必修科目と選択必修科目について

必修科目とは卒業要件として必ず単位修得しなくてはならない科目です。選択必修科目とはいくつかの科目をまとめたグループの中から、必要な科目数、単位数を修得しなくてはならない科目です。どちらも、各カリキュラムでまず学ぶべきものとして示されていますので、開講学年になったら必ず履修登録し、単位取得しましょう。

3) 履修制限・履修条件に気を付けよう

履修要綱の科目一覧を見ると、右の欄の「備考」に注意事項が記されている場合があります。ここに履修制限・履修条件が記載されている場合は、それらを満たさないと履修登録ができません。履修できる学年や、履修するために必要な別の科目など、重要な事項が記されていますので、これも注意が必要です。学年による履修制限は、開講学年以降であれば受講できるケースが大半ですが、科目の中には「〇年次以降は履修不可」のように、学年があがると履修できない科目もあります。

以上、履修登録の基本的な考え方を、共通教育プログラムを主として述べてきました。履修要綱は複雑ですが、ポイントをおさえるといろんな事が見えてきます。また、履修登録期間は慌ただしい時期でもありますが、自分の学修を振り返る機会でもあります。履修登録で悩むのは当然です。学修支援センター相談室は、履修登録の相談も受け付けていますので、ぜひ、気軽に相談に来てください。

あらためて、ノートテイクとは？

ーオンライン授業を経験してー

学修支援センター

聴覚障害のある学生に対する学修支援の一つに、ノートテイクがあります。國學院大學でもノートテイク支援を実施して合計十年以上になりますが、このたびのコロナ下の遠隔授業化では新たな対応を迫られました。この記事では、あらためてノートテイクについて紹介するとともに、授業をする教員に何ができるのかを考えます。

📌 情報保障と学修支援の考え方

聴覚障害とは、音が聞こえにくい、あるいは聞こえない状態であり、原因は人により異なります。聞こえ方にも大きな個人差があります。また、その人が受けてきた教育により、音声言語と手話言語のどちらを主として用いるかという違いもあります。聴覚障害があっても、手話に慣れてない人もいます。

大学には、聴覚に限らず何らかの障がいのある学生がいます。本学では、学修支援センターが個々の授業を担当する教員に合理的配慮の提供を依頼し、また学生本人に必要な支援を提供する体制をとっています。受講にあたっての合理的配慮とは、当該学生が「授業に参加できる」状況を整えることを目的としたものであり、「単位取得」を目的とするものではありません。異なる障害をもつ学生たちの個々の困難に合わせ、教員側の過度の負担にならない対応を、合理的配慮として求めています。

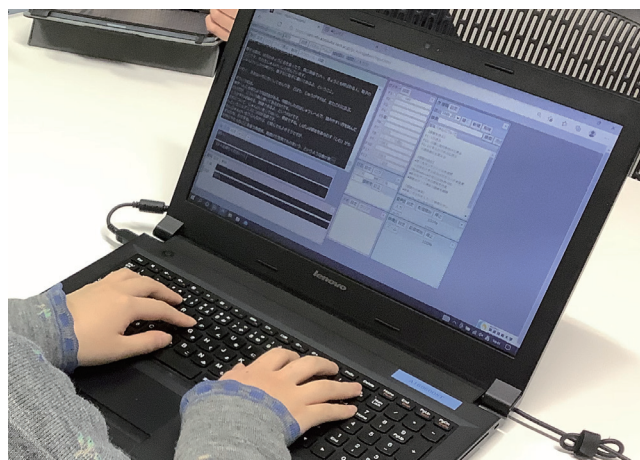
聴覚障害のある学生に対しては、何よりも情報保障が必要です。授業で教員が何を話しているのか、教室で何が起こっているのかがわからない、という状態にならないようにしなければなりません。他の学生が体を揺らし、笑っているのは、教員が冗談を言ってウケたからだ、と理解してもらうことが必要です。授業内容に関係ないから、文字では面白さが伝わらないから不要な情報だとかえがちですが、その情報の要不要を判断するのは、学生自身です。他の学生が得られる情報と同等の情報を提供し、情報の取捨選択は学生が行うというのが、情報保障の考え方です。本学では、主として後述するノートテイクという方法でこの情報保障を行っています。

なお、聴覚障害のある学生支援についてはPEPNet-Japan（日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク）が支援方法の紹介や体制構築支援、各種情報提供を行っており¹、本学でも大いに参考にしています。

📌 本学での情報保障

本学では、受講生一人に対して二人の学生サポーターが支援に入り、授業での発話等を要約してパソコン入力により画面に表示する方法のことをノートテイクと呼んでいます。つまり、リアルタイムの情報保障です。手書きのノートテイクから始めましたが、数年前からパソコンによるノートテイクを実施しています。

パソコンノートテイクには専用のソフトウェアIPTalk²を用います。コロナ下では、webアプリである



〔captiOnlineでノートテイク中〕

¹ <http://www.pepnet-j.org/>

² <http://www.s-kurita.net/index.html>

captiOnline³を用いて、受講生と学生サポーターが別の場所からオンライン上でノートテイクの画面を共有する方法も採用しました。

用いるソフトが違って、ノートテイクの方法は変わりません。教員や学生の話している内容を要約し、文字にして伝えることです。この場合の要約とは、言葉の枝葉を落とすことであり、先述したように、情報そのものをテイクする側が取捨することはしません。このような考え方や具体的な方法、技法については、筑波技術大学の講師による毎年数回の研修を経て身に着けていきます。

コロナ下での試行錯誤

コロナ下での授業形態は、今年度に入って対面・オンデマンドに分かれました。対面型は支援方法の変更はありません。ただし、口話法を習得している学生の場合は、マスクがあることによって口の形を読むことができず、得られる情報が減ってしまいます。通常よりも、ゆっくりはっきり話すことや、文字情報を増やすことが、教員には求められます。

オンデマンド授業の情報保障の方法は、前期と後期で大きく変わりました。前期は、動画の音声で文字起こす方法を採用しました。字幕作成ソフトが自動生成したデータを、学生サポーターが動画を視聴しながら修正します。この方法は、作成に時間がかかるという問題があります。対面なら90分で終了する授業も、文字起こしには数倍の時間がかかります。そのため、修正済みの文字データを学生に提供するのが授業日より一週程度遅れました。オンデマンド授業には毎回課題提出が付きもののため、担当教員には提出期限の延長を依頼しています。しかし、期限は延びても、課題に取り組む時間の配分が週によりまちまちになり、受講生のスケジュールが立てられないという問題がありました。そのため、後期は受講曜時に合わせてオンデマンド授業の動画を再生し、それをノートテイクする方法を採用しました。これで一件落着きたいところですが、動画には授業の個性を増幅する働きがあるようです。担当する教員により、動画の構成や画面に映る情報量、話し方、動画の長さ等はそれぞれ異なります。情報量を確保することを企図して、動画は0.75倍で再生するという原則を設けましたが、その苦勞についてはインタビューをお読みください。

ノートテイクとディクテーション

テクノロジーの発達とアクセシビリティへの配慮により、MSwordやGoogleドキュメント等の文書作成ソフトには、ディクテーション（音声入力）機能が備わるようになりました。この機能をノートテイクに代替することも可能ですが、喋っている内容をほぼすべて起こすために、リアルタイムで学ぶには情報過多になりがちであり、かつ誤認識もあるため、そのまま用いることはできません。このような理由から、情報を要約して伝えるノートテイクを採用しています。

当事者の声

ノートテイクを利用しながら受講している学生と、ノートテイクをしている学生サポーターに、受講やノートテイクにあたっての苦勞等を聞いてみました。（インタビュー：佐川繭子〔教育開発推進機構〕）

利用学生の声

◎受講にあたって苦勞したこと、大変だったことはどのようなことですか。

——オンデマンド授業の受講に苦勞しました。授業ごとに先生の話し方や、動画のスタイルや長さが異なるので、同じようにノートテイクするのが難しかったようです。再生速度を遅くすると時間がかかり、90分を超えることがありました。

◎解決できましたか。

——サポーターの皆さんと試行錯誤して、改善方法を見つけられました。そのおかげで、受講しやすくなったと思います。

◎オンデマンドと対面授業にはどんな違いがありますか。

——目の前に学生がいるかないかで、先生がお話しになる速さが違うと思いました。

◎オンデマンド授業は、前期は文字起こし、後期はノートテイクと方法を変えましたが、どちらがよかったですか。

——ノートテイクの方が、決まった日時に受講できるので、私にとってはよかったです。ただ、授業内容によっては文字起こしの方が合っているかもしれないと思いました。個人的には文字起こしの方が受けやすい

3 詳しくは、以下参照。

<https://www.facebook.com/captiOnlinePR/>

https://capti.info.a.tsukuba-tech.ac.jp/gs_kokugakuin/index.html

のではと感じる授業があるのですが、最終的には相性の問題だと思います。

学生サポーターの声

①どんなことを心がけていますか。

——ペアでサポートに入るので、相手の状況を見ながら入力するようにしています。テイク中は、利用者さんが見やすいように、どこで言葉を区切るか、誰が話しているのかといった表記や、画面の明るさ等に気を付けています。また、事前に授業内容がわかるとテイクしやすいので、教科書や資料があれば目を通して準備します。

②やりがいを感じるのはどんな時ですか。

——自分たちが支援する学生の力になっていると思う時です。授業後に、わからなかったことがなかったか確認するのですが、「理解できた」と言われると嬉しいです。いつもより多くの情報を伝えられた時も、そう感じます。

③対面授業とオンデマンドのどちらがテイクしやすいですか。

——どちらにもメリット、デメリットがあると思います。対面の場合は、90分で終わりますが、タイプミス等は直す余裕がなく、そのままになります。また、学生の状況を見ながら先生が授業をされるので、ペースがそれほど速くないこともあります。オンデマンドの場合はすでに内容が要約されているので、ほとんど文字にする必要があります。情報量が多くてテイクに時間がかかるけれども、再生速度を遅くできる、わからない箇所は聴き直すことができる、という良さがあります。

④どんなことに苦労しましたか。

——利用者さんが理解しやすいように、ペアで連携してタイミングよく入力し、情報を落とさないようにするのが大変です。また、一文が終わらず、説明が長く続く時は、要約が難しいです。

※3人の学生サポーターにインタビューした内容をまとめています。

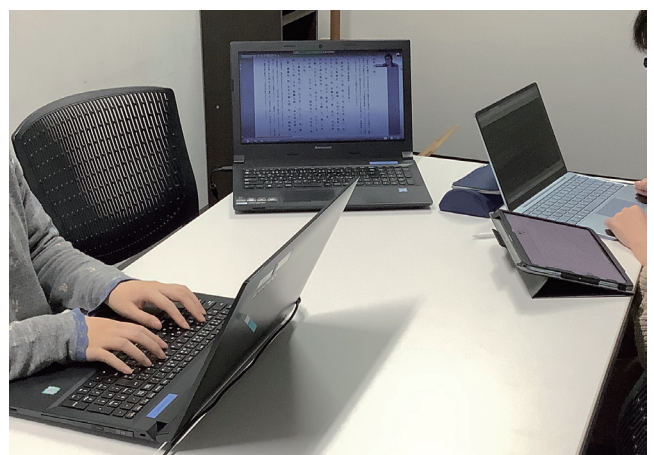
✔ ノートテイクから考える、よりよい授業

学生サポーターは、何よりも利用学生に正しく理解してもらうことを大事にしています。学生に理解してもらうという姿勢は、教員にも必須ですが、実践には難しいものがあります。

聴覚障害に限らず、例えば発達障害のある学生も、「指示を明確にする」という配慮を希望することがあります。個人の症状等によっては、他人が話している内容を即座に理解できない、理解するのに時間がかかる、ということもあります。学生サポーターからは、大事なことは繰り返し言ってくれると助かるという声もありました。伝わるように、わかりやすく話すのは、そう簡単なことではありませんが、ゆっくり話し、重要なことを繰り返すよう心がけるのがよいようです。

また、要領よく学べるのはオンデマンド授業の利点ですが、切り捨てる枝葉がなく、ほとんどテイクしなければならないという密度の濃さは、聴覚障害のある学生にとって他の人より学修に時間を要するという状況を生むのかもしれません。この点を解決するには、音声情報に頼りすぎないことが必要です。配布資料や動画に用いるスライドの文字情報を充実させることが考えられます。学生サポーターからは、オンデマンド授業の場合は、文字だけの資料よりも図表のあるスライドの方が視覚的にわかりやすいという意見もありました。なお、今回は聴覚障害に焦点をあてましたが、視覚障害に対する支援については今後考えていきたいと思っています。

オンデマンド授業は、コロナ後も引き続き採用される方向ですが、その質については様々な角度から検証が必要になるでしょう。



〔オンデマンド授業のノートテイク〕

令和2年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」 受賞者からの声

● はじめに ●

令和2年度は新型コロナウイルス感染症対策に伴い、全学的にオンライン授業への転換が行われ、これまでと全く異なる状況下での授業展開となりました。大学教員も慣れない中で試行錯誤しつつ、その一方では、初めてWeb会議ツールを使ってみたり、新たな教授法を工夫してみたりと、単なる非常時対応にとどまらない、創造的な経験としての側面も持ち合わせていた一年だったように思います。

そんな中で、このたび令和2年度の教育実践を対象として、「学生による授業評価アンケート」に基づき、「到達目標達成度（Q.あなたはこの授業の到達目標を達成できたと思いますか）」の指標で上位を記録した先生方（文学部2名・他学部各1名・兼任教員3名）に「ベスト・ティーチング賞」が授与されました。残念ながら感染症対策の観点から一堂に会しての表彰式は見送りとなりましたが、それぞれの先生方より、コメントをお寄せいただきましたので、本誌上にてご紹介いたします。

澤田 浩一 先生（文学部教授）

〔社会科教育法、道徳教育の理論と方法 ほか〕

仰天するとともに只々感謝しております。オンライン授業の中で受講生の学び合いをどうしたら実現できるかに悩んだ1年でした。毎時間ブレイクアウトルームを活用し、話し合い活動を行いました。上手いくグループばかりではありませんでした。時おりランダムなグループ編成も試みました。1年生の授業では、友人ができ、この時間が唯一の楽しみという学生も少なからずおりました。人とのつながりを大切にしたいと考えています。教科教育法の授業で、9月～11月に希望者のほとんどが対面での模擬授業を行えたことも有り難いことでした。

矢部 健太郎 先生（文学部教授）

〔史学展開演習Ⅰ・Ⅱ、日本時代史Ⅳ ほか〕

このたびは、令和2年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」をご恵与いただき、誠にありがとうございます。コロナ禍に直面し、初めてのオンライン講義に挑戦したわけですが、文書の折り方などの説明は、パソコン画面上での授業に適していたかと思います。極力、対面での授業と変わらないテンションで、自分が面白がっている内容をわかりやすく伝えることに心を尽くしましたが、受賞できたのは、困難な状況下でも積極的に授業や課題に取り組んでくれた学生諸君のおかげです。心から感謝し、再来年度も受賞できるよう努めたいと思います。

中川 孝博 先生（法学部教授）

〔刑事法入門、刑事訴訟法 ほか〕

コロナ禍において授業の再構築を迫られた際、「オンラインに変更しても授業の到達目標は絶対に変えない」と決意しました。カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーの実現に影響が出ないようにするためです。それだけに、到達目標達成度に関して高い評価を得たことは非常に嬉しく思います。授業の実際につきましては、拙稿「ウィズコロナ時代の実定法解釈学授業」大出良知・高田昭正・川崎英明・白取祐司先生古稀祝賀論文集『刑事法学と刑事弁護の協働と展望』（2020年、現代人文社）858頁をお読みいただければ幸いです。

辻 和洋 先生（経済学部特任助教）

〔ビジネスデザイン、リーダーシップ基礎 ほか〕

この度は身に余る賞をいただきありがとうございます。授業を試行錯誤している中で、評価していただき、とても励みになります。

私は、授業はその場にいる全ての人間で作り上げるものだと考えています。状況的学習論などに依拠する学習法であるアクティブラーニング型の授業を担当していますが、その中で経済学部には上級生が下級生の学びをサ

ポートする「FA」という制度があります。教員と受講生が「対の関係」になりがちな授業が、上級生を交えると「横並びの関係」に変化していきます。教員、FA、受講生という3者の強みが発揮され、一人ひとりが学びの主体者となる効果を感じています。今後も社会情勢に応じた多様な学びのあり方を模索していきます。

齊藤 智朗 先生（神道文化学部教授）

〔神道概論、国学概論、宗教学演習 ほか〕

この度は「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」をいただき、まことに光栄に存じます。令和2年度は私自身にとって初めての遠隔授業であり、これまで対面で板書しながら教えていた授業内容を、遠隔でも同じ様に伝えるにはどうすれば良いかと大変苦慮しました。また毎回授業資料の作成や録音・録画作業に追われ、なんとか1年間やり遂げたという心境です。そのため今回の受賞は大きな驚きであったとともに、とても嬉しく思います。昨年度培った経験は、対面・遠隔の実施形態に関係なく、今年度を含めてこれからの授業運営に活用し、学生の修学意欲の向上につなげていきたいと考えております。

近藤 良彦 先生（人間開発学部教授）

〔宇宙物理学入門、理科実験・観察法 ほか〕

授業評価アンケートに答えてくれてありがとうございます。これまでの皆さんの率直な意見のおかげでこの受賞に至りました。担当している理数系の科目は多くの皆さんにとって取っつきにくいようですが、レベルは下げたくないので、わかりやすい授業にしようと思ってきましたが、その中で皆さんの回答はとても役に立ちました。そこからヒントを得て作成した様々な教材には想定外の遠隔授業でも助けられました。到達目標を達成できたと思えることが多くなったようで、ようやくわかりやすい授業になってきたのかな。皆さんの興味を掻き立てられていたらそれだけで嬉しいです。

種稲 秀司 先生（兼任講師）

〔東洋地域史Ⅰ、史学応用演習（外国史） ほか〕

力を入れたのは、①複数の国が関係する歴史を扱ったので、各国の当時の価値観、立場を念頭に、どこが交差したのか、しなかったのかを考える。②難しい話をしてもらって大要は理解してもらえるように、毎回の最初に大まか

な内容、最後にまとめの時間を設け、大事なことは違う回でも様々な比喻を交えて繰り返し丁寧に説明する。③授業の補足と改善では、K-SMAPYⅡを通じた質問、感想等の募集は学生が答えやすいように無記名とした上ですべてに回答、回答も受講者全員が共有できるようにQ&A方式にしてアップしたことです。今回の受賞につき、改めて受講した学生、関係者に御礼を申し上げます。

久保 哲也 先生（兼任講師）

〔スポーツ実技、生涯スポーツ実技（サッカー） ほか〕

この度は身に余る賞をいただき、大変嬉しく思っております。光栄でありますと共に一層身が引き締まる思いです。評価をしていただいた学生の皆さん、日頃より大変お世話になっております教職員の方々に厚く御礼申し上げます。前期の遠隔授業は手探り状態で大変でしたが、後期の対面授業では皆さんの本当に楽しそうな笑顔に救われました。体育実技では運動量の確保、コミュニケーション能力や協調性が育まれるような授業になるよう意識しながら、積極的に学生に話しかけております。今後も学生と共に成長できるよう精進してまいります。

佐々木 雄一 先生（兼任講師）

〔国際私法A・B〕

思いがけず賞を頂き恐縮しております。私は、令和2年度は全て遠隔授業としました。K-SMAPYⅡを利用して毎回講義資料と課題を提示して、受講者と課題の提出、返却を繰り返すこととなりました。特に留意した点は、学生が安心できるように、とにかく早く採点して結果をフィードバックすることと、質問に丁寧に回答することでした。

新型コロナ危機が沈静化するまでには相当な年月がかかるのではないかと考えられます。この機会に学生の要望に応じて多様な授業形態を用意し、教室ほかの大学施設の衛生環境を一層充実できればと思います。

教育開発推進機構 オンライン講演会・研修会 開催報告

令和3年度 オンラインFD講演会（令和3年10月27日）

互いの関係性を構築するためのコミュニケーション術 ～遠隔授業を意識した教員と学生との関係性～

講師 葛 文綺 氏（愛知学院大学 心身科学部 心理学科 准教授）

対象 本学専任教職員

形態 ZOOMによるライブ講義形式

令和2年度以来、全学的なオンライン授業の展開によって、従来行われていた「教室で直接顔を合わせて言葉を交わす」という、これまでの常識的な授業のありようは一挙に崩れ、現在に至るまで教育活動の場は通信回線上のやり取りに制約されています。そのような状況下で、今まで以上に、教員と学生・学生同士のコミュニケーションの重要性和難しさが浮き彫りになってきた感があります。そこで、本年度のFD講演会は、「学生とのコミュニケーション」をテーマとして、愛知学院大学の葛文綺准教授をお招きしてオンライン講義形式でご講演いただきました。

講演では、新しい生活様式への移行に伴い、オンライン上でのコミュニケーション機会が増加する一方、非言語的な情報が伝わりにくくなったことで話し相手の全体像が掴みにくくなり、様々な意思疎通の困難・齟齬が生じやすくなっている事態について、オンライン授業時に生じがちなトラブルや困りごとを例にとって説明がなされました。その上で、臨床心理学の知見を活かしつつ、短くとも教員・学生間の会話量を増やすことで信頼感を醸成し、また積極的に良い点を「褒める」ことで学生のモチベーションを高めていくこと、「叱る」ことが必要なときは問題提起と改善提案にポイントを絞り、あくまでも望ましい行動を促す動機付けを目的とすることを念頭におくこと、等のポイントについても丁寧に解説がなされました。さらに、教員にも学生にも様々なタイプの性格があり、それぞれに応じてコミュニケーションの取り方を工夫して行く必要があるとして、現実重視・感覚重視・協調重視・思考重視といった四つのタイプを例にとって、それぞれの特性に応じた意思疎通や指導の仕方について、ワークを交えて検討を行いました。また、講演終了後は、参加者との質疑応答・意見交換がなされました。

令和3年度 オンライン新任教員研修・FDワークショップ

①第2回新任教員研修・FDワークショップ（令和3年6月28日～7月31日）

(1)「國學院大學校史」

(2)「学習成果の可視化—成績評価とフィードバック—」※第1回FDワークショップを兼ねて実施

講師 (1) 渡邊 卓 氏（研究開発推進機構 准教授）、(2) 小濱 歩（教育開発推進機構 准教授）

対象 (1) 本学新任教員、(2) 本学新任教員および全専任教職員

形態 オンデマンド動画配信形式

②第3回新任教員研修・FDワークショップ（令和3年12月23日～令和4年2月28日）

（1）「シラバスの作成方法～到達目標記述の考え方～」

（2）「ループリック評価（入門編&実践編）」※第2回FDワークショップを兼ねて実施

講師 （1）小濱 歩（教育開発推進機構 准教授）

（2）佐川繭子（教育開発推進機構 准教授）、加納なおみ（教育開発推進機構 准教授）、小濱 歩

対象 （1）本学新任教員、（2）本学新任教員および全専任教職員

形態 オンデマンド動画配信形式

例年、新任教員を対象とする「新任教員研修」、全専任教員に開かれた「FDワークショップ」を実施しています。本年度は令和2年度に引き続き、感染症対策のためオンライン（オンデマンド動画配信形式）での実施となりました。6月末の研修会では、本学の歴史と、成績評価の方法とその背景にある「学修成果の可視化」についての講座を実施。12月末の研修会では、成績評価と対応する「教育目標の設定」をテーマとして、具体的にはシラバスにそれぞれの授業の「到達目標」の記述方法をどのように設定するかについてのレクチャーを行いました。また、あわせて、成績評価の方法のひとつである「ループリック評価」について、その概要について解説する入門編講座、および、機構教員による事例紹介と意見交換を行う実践編講座を実施しました。

令和3年度 データサイエンスFD研修会（令和3年12月15日）

データサイエンスの意味を理解し、 デジタルトランスフォーメーションを考える

講師 高橋 尚子 氏（経済学部 特別専任教授）

対象 本学専任教職員

形態 ZOOMによるライブ講義形式

教育開発推進機構では、「Society5.0」に向けた情報教育の推進や、「デジタルトランスフォーメーション（DX）」への対応が大学にとって喫緊の課題となりつつある中、本学教職員がその社会的背景や進展状況について一般的・基礎的な理解を持ち、大学における教育・研究活動にもたらされる影響・変化・今後の展望について具体的なイメージを共有することを目的として、令和2年度より「データサイエンスFD研修会」を開催しています。本年度は、昨年度に引き続き、ZOOMによるオンライン講義形式で実施されました。

今回は、経済学部の高橋尚子教授より、「そもそもデータとは何か」「データサイエンスがでてきた背景とは」という基本的な前提からお話をさせていただきました。データサイエンスやDXは、われわれ大学教職員にとっても決して縁遠いテーマではなく、「データというものとつきあい、これを活用していく」ということが、すでに教育・研究活動や日常生活の中にまで深く浸透しつつあるのだということが、年末調整・科研費の申請・電子マネーの利用といった身近な事例を引きつつわかりやすく説明され、その進展をよくわからないものとして退けるのではなく、むしろ、それぞれの分野における教育・研究活動の効率性や効果を高め、新しい教育形態や研究手法を創造して行く契機として行くことを考えようとの提言がなされました。また、それを受けて、参加者との間でオンライン上での質疑応答・意見交換もなされました。

教育開発推進機構彙報 (令和3年7月1日～令和3年12月31日)

※肩書き等は当時のもの

行事

6月7日～7月9日：教員採用試験一次対策指導会
6月30日：教育実習東京都立学校希望者・大学一任対象実習校申請
7月5日・6日：介護等体験8月直前ガイダンス
7月7日～7月10日：教員免許状一括申請登録会（一次）
7月8日：介護等体験2年目②ガイダンス（欠席者向け）
7月10日：TOEIC®学内テスト
7月18日～8月12日：教員採用試験二次対策指導会
7月21日：[オンライン] 学生サポーター報告会
7月24日：[オンライン] 介護等体験2年目③ガイダンス
7月24日・26日：介護等体験8月直前ガイダンス（欠席者向け）
8月2日・5日：介護等体験9月直前ガイダンス
8月16日～20日：教員免許状更新講習
8月23日～9月19日：教員採用試験対策夏期集中講習会
9月21日：介護等体験10月直前ガイダンス
10～12月：English Lounge
10月2日・6日：介護等体験11月・12月直前ガイダンス
10月6日・26日：教員求人登録説明会
10月9日：TOEIC®学内テスト
10月9日～12月18日：教員就職支援 専門教科ゼミナール
10月13日～30日：[オンライン] 介護等体験1年目②ガイダンス
10月13日～12月1日：教員就職支援 教職総合ゼミナール
10月21日～11月26日：後期教育小論文講習会
10月26日～11月7日：第1回教員採用模試（自宅受験）
11月6日：秋季特別教員就職ガイダンス
11月10日：[オンライン] オンラインパソコンノートテイク体験会（講師：筑波技術大学 宇都野康子氏）
11月10日～11月13日：教員免許状一括申請登録会（二次）
11月10日：教員採用試験合格者報告会
11月17日～12月15日：首都圏教育委員会教員採用試験学内説明会（8自治体）
11月24日：[オンライン] 介護等体験代替措置ガイダンス
11月27日：TOEFL ITP学内テスト
12月6日：[オンライン] 学生サポーター研修会（講師：筑波技術大学 宇都野康子氏）
12月11日：TOEIC®学内テスト
12月14日：教員就職支援 志望県別学習相談会
12月15日：[オンライン] 学生サポーター研修会（講師：筑波技術大学 宇都野康子氏）
12月18日・21日・24日・25日：教職教養冬期集中講習会
12月23日：教育実習東京都立学校希望者・大学一任対象実習校発表
12月24日：TOEIC®学内テスト（1年生のみ）

FD活動・教育支援

7月29日：[オンライン] 令和3年度「オンラインコーヒープレイク」
10月27日：[オンライン] 令和3年度FD講演会「互いの関係性を構築するためのコミュニケーション術～遠隔授業を意識した教

員と学生との関係性～」(講師：葛文綺 愛知学院大学心身科学部心理学科 准教授)

12月15日：[オンライン] 令和3年度データサイエンスFD研修会「データサイエンスの意味を理解し、デジタルトランスフォーメーションを考える」(講師：高橋尚子 本学経済学部 特別専任教授)

12月23日～2月28日：[オンライン] 令和3年度第3回新任教員研修・第2回FDワークショップ（オンデマンド）

①「シラバスの作成方法～到達目標記述の考え方～」(講師：小濱歩 教育開発推進機構准教授)

②「ルーブリック評価（入門編・実践編）」(講師：佐川繭子 教育開発推進機構准教授、加納なおみ 同准教授、小濱歩)

※②は第2回FDワークショップと合同開催

情報収集・外部研修・セミナー参加等

7月1日：[オンライン] 2021年度第1回千葉大学アカデミック・リンク/ALPSセミナー「デジタル・ペダゴジー」参加（新井）

7月5日：[オンライン] 関東圏FD連絡会（立教大学）参加（石川・原田・仙北谷・小濱）

9月10日：[オンライン] Biz Webinar「奇跡の高等教育を呼ぶ魔法の杖「インストラクショナルデザイン(ID)」」参加（小濱・佐川）

10月9日：[オンライン] 数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム 2021年度公開シンポジウム「社会課題解決をドライブするデータサイエンス」参加（小濱）

10月29日：[オンライン] 数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム 2021年度 関東・首都圏ブロック第5回ワークショップ参加（小濱）

10月29日：[オンライン] 北海道大学高等教育推進機構オープンエデュケーションセンターオンライン教育セミナー「ツールキットを活用した授業設計と改善」(佐川)

10月22日～11月22日：筑波大学ダイバーシティ&インクルージョン教育拠点「教育のユニバーサルデザインについて考える」(オンデマンド) 視聴（佐川・小濱）

11月2日：[オンライン] 名古屋大学教育基盤連携本部 高等教育システム開発部門シンポジウム「大学のデジタルトランスフォーメーション (DX) と学生生活」参加（小濱）

11月27・28日：[オンライン] 大学教育学会課題研究集会「学生が成長するための大学教育～新たな展開への挑戦」参加（小濱）

12月13日：[オンライン] 関東圏FD連絡会（青山学院大学）参加（石川・原田・仙北谷・新井・小濱）

12月18日：[オンライン] 教育関係共同利用拠点提供プログラムPDP「ポストコロナ時代と「大学」の〈時間〉」参加（小濱）

刊行物・WEB公開

9月1日：『教育開発ニュース』第24号刊行

そっ たく どう じ
啖 嚙 同 時

— 編集後記 —

本年度「オンラインコーヒープレイク」は専門分野ごとの授業実践や、After/Withコロナの展望について意見交換を行いました。学修支援の方面では、履修登録の考え方についての解説、コロナ下でのノートテイク支援のあり方・当事者の声を取り上げています。全国的な遠隔授業の導入から2年近くが経過し、対面とオンラインの併存が徐々に定着するにつれて、授業の質とは何か、支援とはいかにあるべきかが問い直されつつあります。本誌におけるこのささやかな報告が、考えを深める一助となれば幸いです。（小濱）

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース!』第25号 令和4年3月1日発行

発行人 石川 則夫 編集人 小濱 歩・鈴木 崇義

発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28